5
南北の王
聖徒伝 149

「滅びの道に希望はあるか」

列王記Ⅱ17章　アッシリア捕囚・北王国イスラエルの滅亡

Shikaoichurch.com

アウトライン

0. イントロダクション

Ⅰ. アッシリア捕囚　17:1〜8

Ⅱ. アッシリア捕囚の理由　17:9〜23

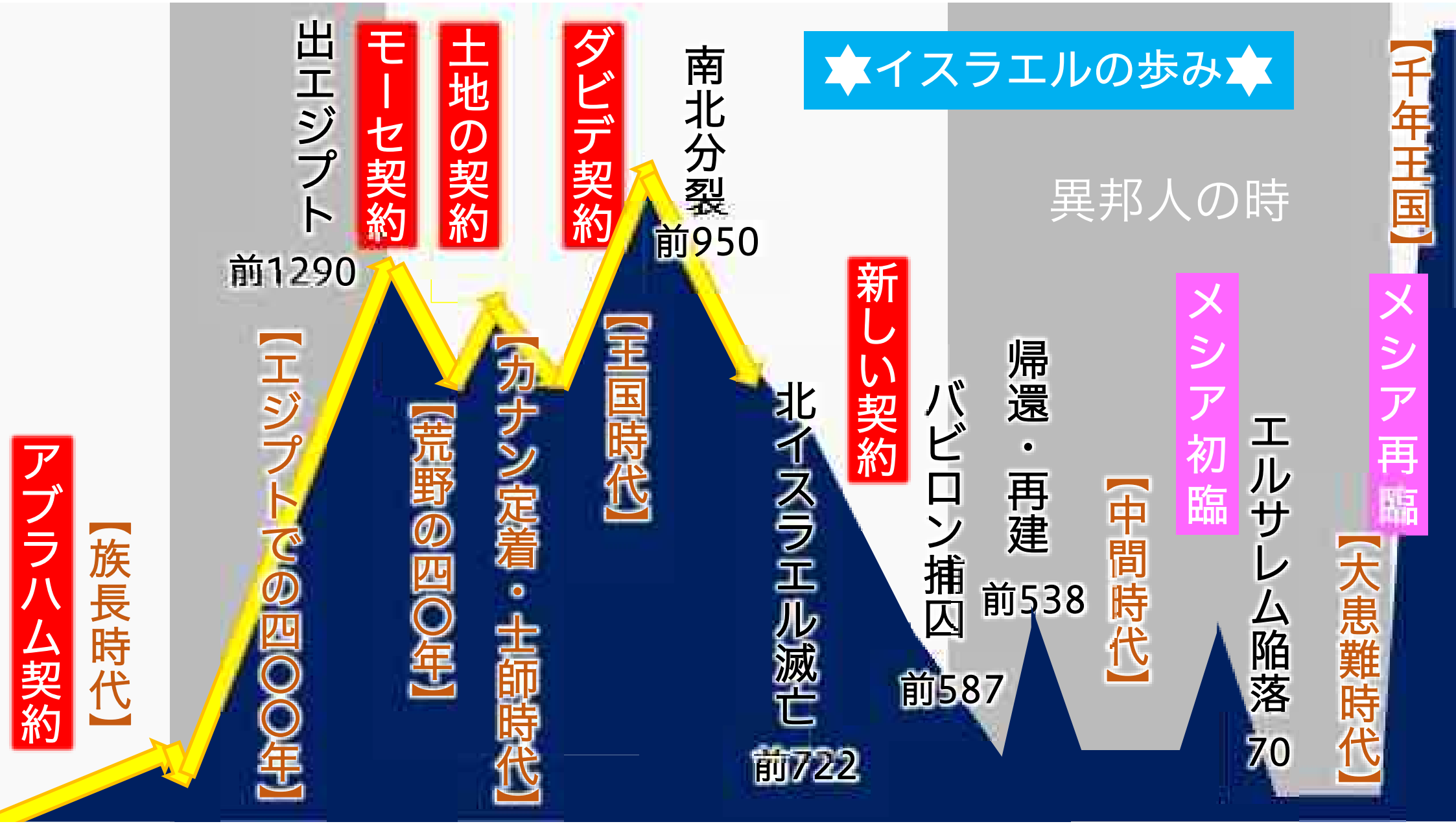
Ⅲ. アッシリア捕囚の結果　17:24〜33

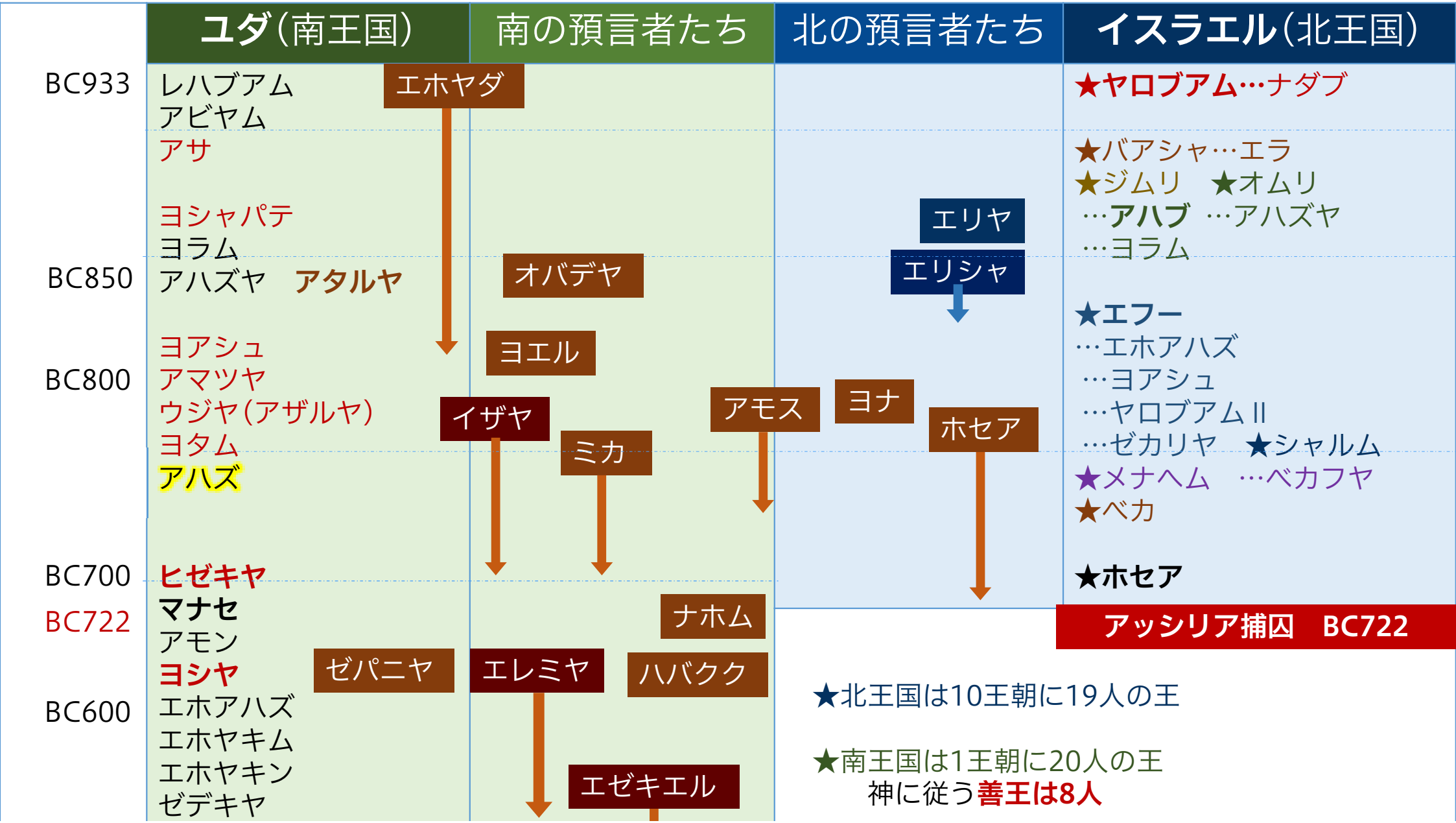
Ⅳ. まとめと適用

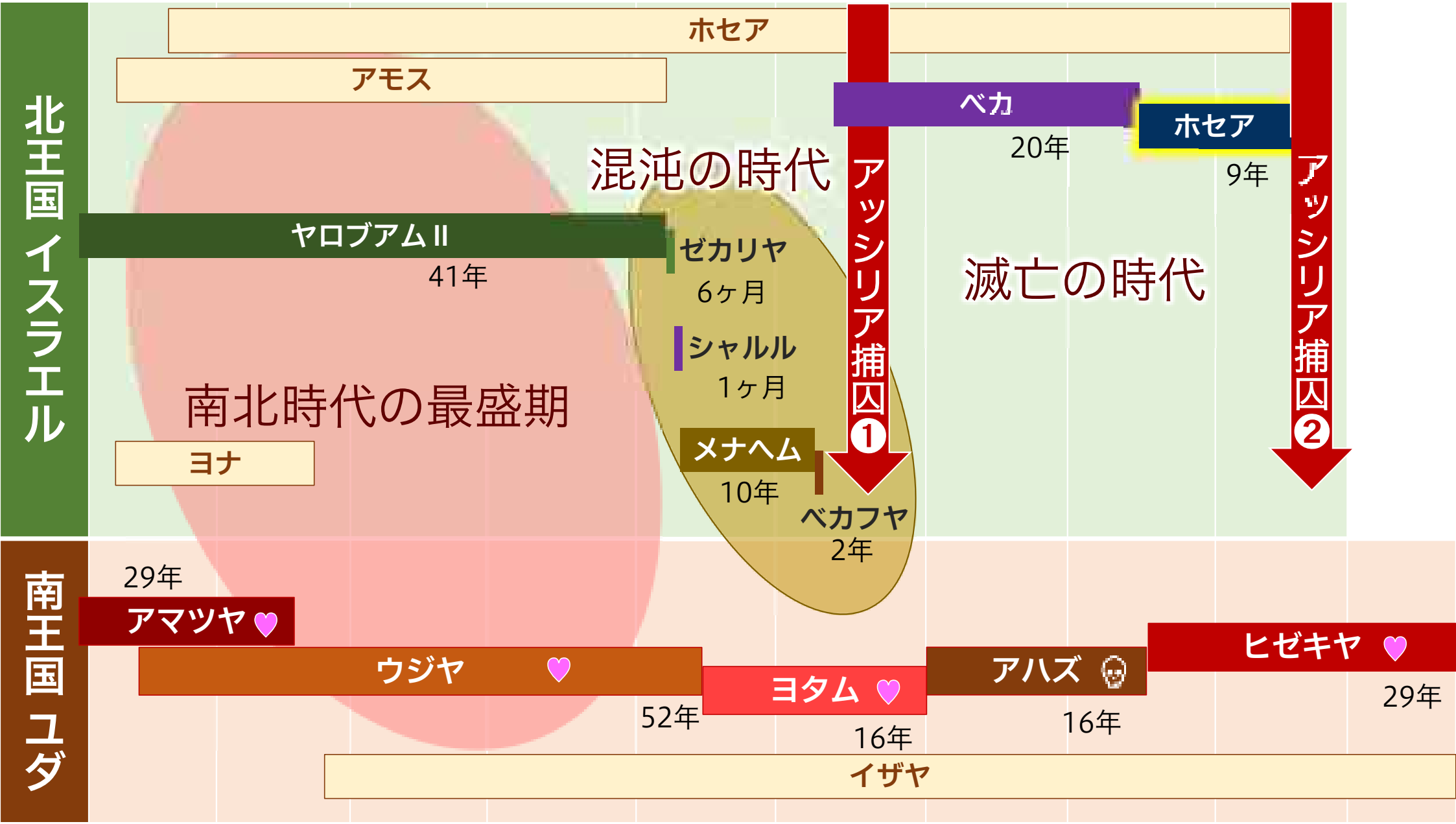
自分という偶像の時代に

対峙しよう

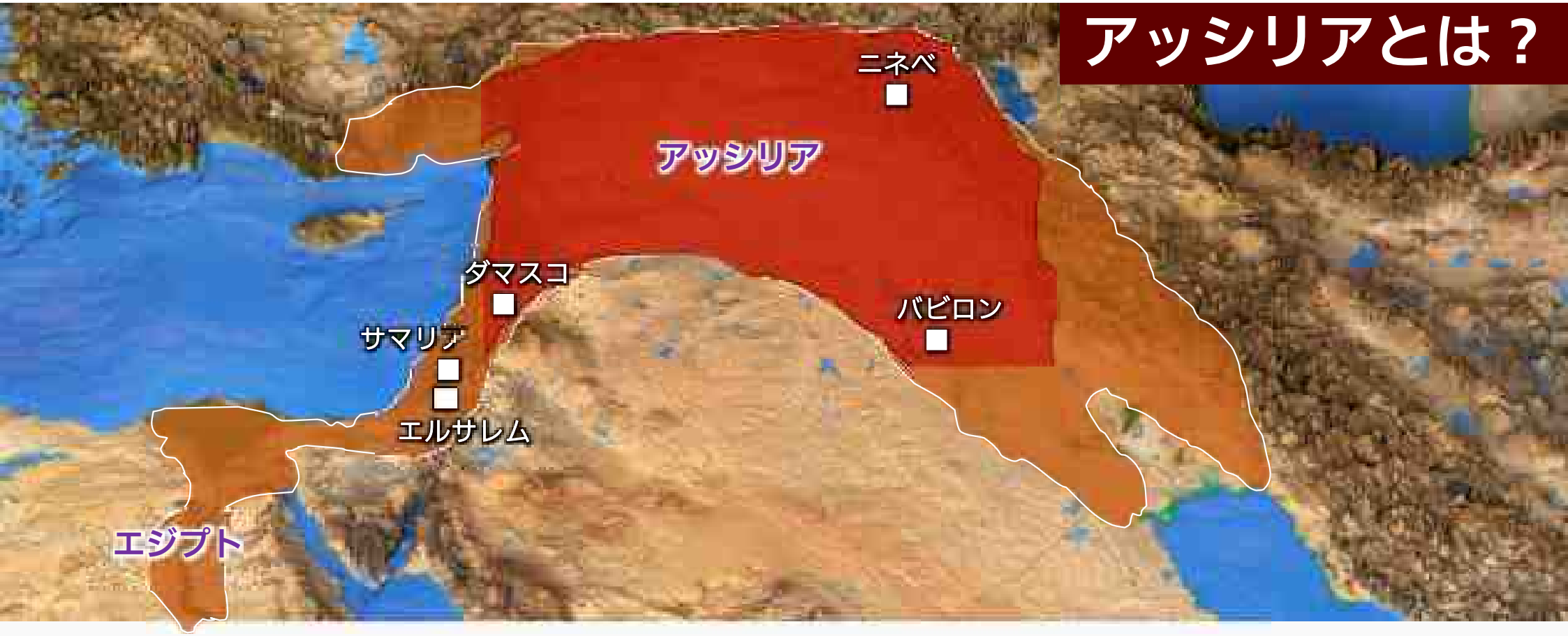
【無垢の時代】
天地創造
【良心の時代】
堕罪
~大洪水
【人類統治の時代】
バベルの塔事件
【約束の時代】
アブラハム
～ヤコブ
【律法の時代】
イスラエル
王国時代
メシア初臨
【恵みの時代】
聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨
【御国の時代】
千年王国
大審判
新天新地
①エデン契約
②アダム契約
③ノア契約
④アブラハム契約
⑤モーセ契約
⑥土地の契約
⑦ダビデ契約
⑧新しい契約
どの時代も
神の約束が礎にある
過　去
現　在
未　来


イスラエルの歩み
アブラハム契約
【族長時代】
【エジプトでの四〇〇年】
出エジプト
前1290
モーセ契約
土地の契約
【荒野の四〇年】
【カナン定着・士師時代】
ダビデ契約
【王国時代】
南北分裂
前950
北イスラエル滅亡
前722
新しい契約
バビロン捕囚
前587
帰還・再建
前538
【中間時代】
異邦人の時
メシア初臨
エルサレム陥落
70
【大患難時代】
メシア再臨
【千年王国】


ユダ(南王国)
南の預言者たち
北の預言者たち
イスラエル(北王国)
BC933
BC850
BC800
BC700
BC722
BC600
レハブアム
アビヤム
アサ
ヨシャパテ
ヨラム
アハズヤ
アタルヤ
ヨアシュ
アマツヤ
ウジヤ(アザルヤ)
ヨタム
アハズ
ヒゼキヤ
マナセ
アモン
ヨシヤ
エホアハズ
エホヤキム
エホヤキン
ゼデキヤ
エホヤダ
オバデヤ
ヨエル
イザヤ
ミカ
アモス
ヨナ
ホセア
ナホム
ゼパニヤ
エレミヤ
ハバクク
エゼキエル
エリヤ
エリシャ
★ヤロブアム…ナダブ
★バアシャ…エラ
★ジムリ　★オムリ
…アハブ　…アハズヤ
…ヨラム
★エフー
…エホアハズ
…ヨアシュ
…ヤロブアムⅡ
…ゼカリヤ　★シャルム
★メナヘム　…ベカフヤ
★ベカ
★ホセア
アッシリア捕囚　BC722
★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王
神に従う善王は8人


北王国 イスラエル
南王国 ユダ
ホセア
アモス
ベカ
20年
ホセア
9年
混沌の時代
アッシリア捕囚❶
アッシリア捕囚❷
ヤロブアムII
41年
ゼカリヤ
6ヶ月
シャルル
1ヶ月
滅亡の時代
南北時代の最盛期
ヨナ
メナヘム
10年
ベカフヤ
2年
29年
アマツヤ
ウジヤ
52年
ヨタム
16年
アハズ
16年
ヒゼキヤ
29年
イザヤ

アッシリアとは？



- 古代から存在。BC10～7世紀の**新アッシリア**後期に世界帝国に。
- BC722年。北王国・イスラエルを滅ぼす。**（アッシリア捕囚）**

Ⅰ．アッシリア捕囚　列王記第二17章1～8節

【北王国最後の王ホセア】列王記Ⅱ17:1～2

ユダの王アハズの第十二年に、エラの子ホセアがサマリアでイスラエルの王となり、九年間、王であった。

彼は【主】の目に悪であることを行ったが、彼以前のイスラエルの王たちのようではなかった*。

＊最後の王は、北王国では一番ましだった？

➡といっても不信仰な悪王なのは、変わらず。

■多少の躊躇や、神への恐れがあったとしても、悔い改めに至らなければ、意味はない。

【イスラエルの属国化】列王記Ⅱ17:3～4

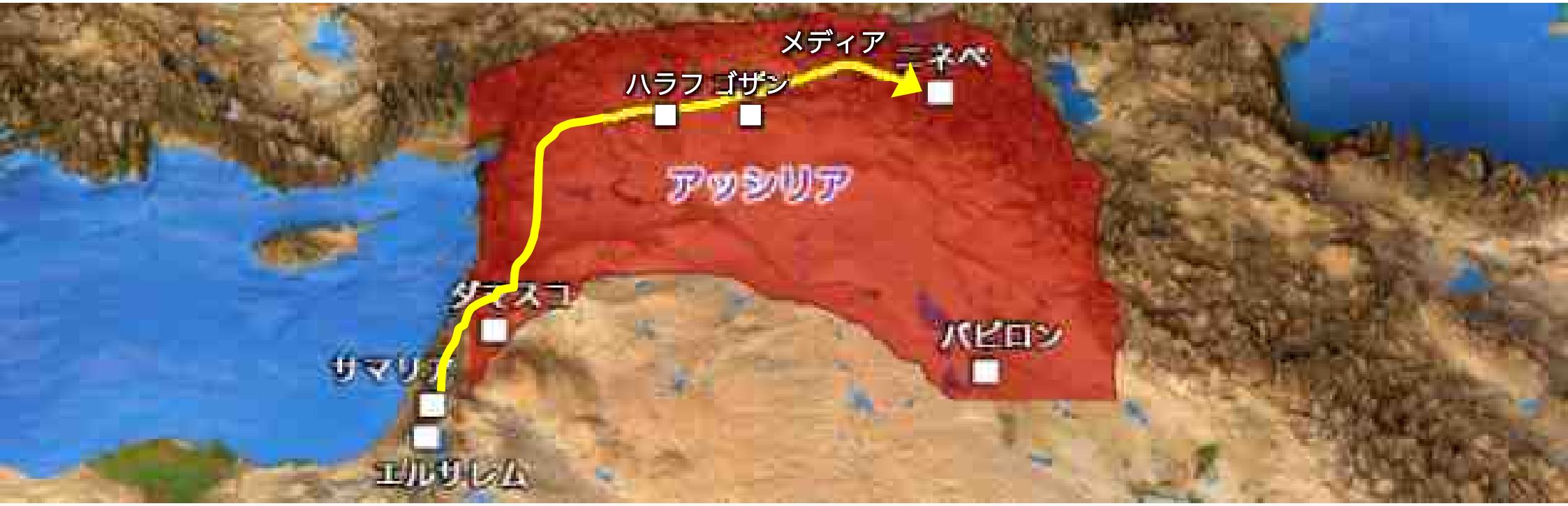
アッシリアの王シャルマネセルが攻め上って来た。そのとき、ホセアは彼に服従して*、貢ぎ物を納めた。

しかし、アッシリアの王はホセアの謀反に気がついた。ホセアがエジプトの王ソに使者たちを遣わし*、アッシリアの王には年々の貢ぎ物を納めなかったからである。そこで、アッシリアの王は彼を捕らえて牢獄につないだ。

＊イスラエル北部がアッシリア直轄の属州に。

　北王国、南王国は、アッシリアの属国に。

＊エジプトを後ろ盾に反抗しようと企てたが…



【アッシリア捕囚】列王記Ⅱ17:5～6

アッシリアの王はこの国全土に攻め上り、サマリアに攻め上って、三年間これを包囲した。 ホセアの第九年に、アッシリアの王はサマリアを取り、イスラエル人をアッシリアに捕らえ移し、彼らをハラフと、ゴザンの川ハボルのほとり、またメディアの町々に住まわせた。

【偶像礼拝の末路】列王記17:7～8

こうなったのは、イスラエルの子らが、自分たちをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王ファラオの支配下から解放した自分たちの神、【主】に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、【主】がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習にしたがって歩んだからである。

Ⅱ．アッシリア捕囚の理由　列王記第二17章9～23節

【偶像礼拝への神の怒り】列王記Ⅱ17:9～11

イスラエルの子らは、自分たちの神、【主】に対して、正しくないことをひそかに行い、見張りのやぐらから城壁のある町に至るまで、すべての町に高き所を築き、すべての小高い丘の上や、青々と茂るどの木の下にも石の柱やアシェラ像*を立て、【主】が彼らの前から移された異邦の民のように、べての高き所で犠牲を供え、悪事を行って【主】の怒りを引き起こした。

【繰り返された神の警告】列王記Ⅱ17:12～13

【主】が彼らに「このようなことをしてはならない」と命じておられたのに、彼らは偶像に仕えたのである。

【主】はすべての預言者とすべての先見者*を通して、イスラエルとユダに次のように警告された。「あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通してあなたがたに伝えた律法全体にしたがって、わたしの命令と掟を守れ。」

＊ヤロブアム時代のアヒヤ、獅子に襲われた無名の預言者、エリヤ、エリヤ、ヨナ、アモス、ホセア…

【空しいもの】列王記Ⅱ17:14～15

しかし、彼らはこれを聞き入れず、彼らの神、【主】を信じなかった彼らの先祖たちのように、うなじを固くした。

彼らは主の掟と、彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告を蔑み、空しいものに従って歩んだので、自分たちも空しいものとなり*、【主】が倣ってはならないと命じられた、周囲の異邦の民に倣って歩んだ。

＊人は、自らが従うものと同じ性質を帯びていく。

➡主を拒んだ者は、やがて主に拒まれる。

【偶像の忌まわしい儀式】列王記Ⅱ17:16～17

彼らの神、【主】のすべての命令を捨て、自分たちのために、鋳物の像、二頭の子牛の像を造り、さらにアシェラ像*を造り、天の万象を拝み、バアル*に仕えた。

また、自分たちの息子や娘たちに火の中を通らせ*、占いをし、まじないをし、【主】の目に悪であることを行うことに身を任せ、主の怒りを引き起こした。

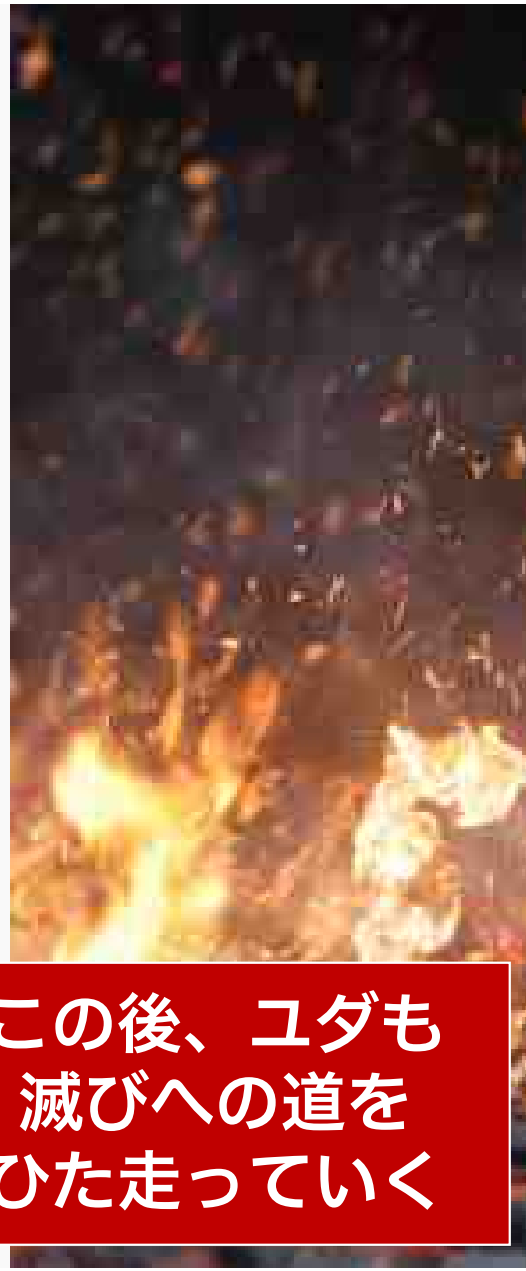
＊豊穣の女神、バアルの妻　＊雷の神・男神

＊カナンのモレク神信仰の人身供養の儀式

【投げ捨てられたイスラエル】列王記Ⅱ17:18～20

そのため【主】はイスラエルに対して激しく怒り、彼らを御前から除かれた。ただユダの部族だけが残った。ユダも、彼らの神、【主】の命令を守らず、イスラエルが取り入れた風習にしたがって歩んだ。

そのため【主】はイスラエルのすべての子孫を蔑み、彼らを苦しめ、略奪者たちの手に渡し、ついに彼らを御前から投げ捨てられた。



■首の皮一枚つながった、南王国・ユダ。
善王たちの信仰、残れる信仰者（レムナント）
何より、ダビデ王との主の約束のゆえに。

この後、ユダも滅びへの道をひた走っていく

【最初の王・ヤロブアムの罪】列王記Ⅱ17:21

主がイスラエルをダビデの家から引き裂かれたとき、彼らはネバテの子ヤロブアムを王としたが、ヤロブアムはイスラエルを【主】に従わないように仕向け*、そうして彼らに大きな罪を犯させた。

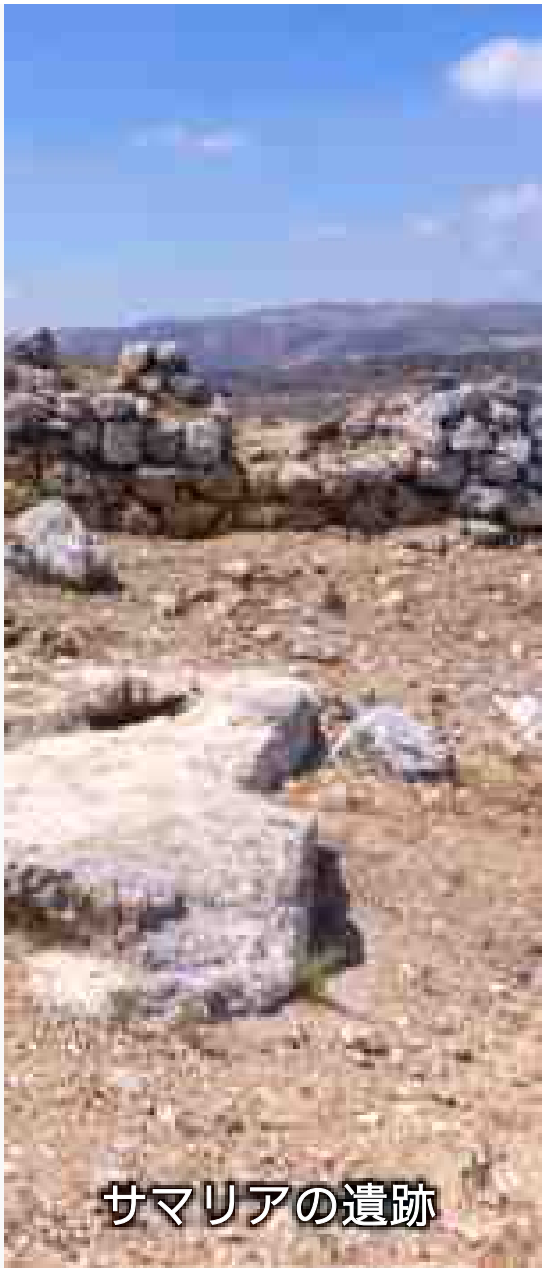
＊北王国の南端のベテル、北端のダンに、
金の子牛の象を築かせた。

➡北王国の王は皆、金の子牛を拝み続けた。

【預言通りの結末】列王記17:22～23

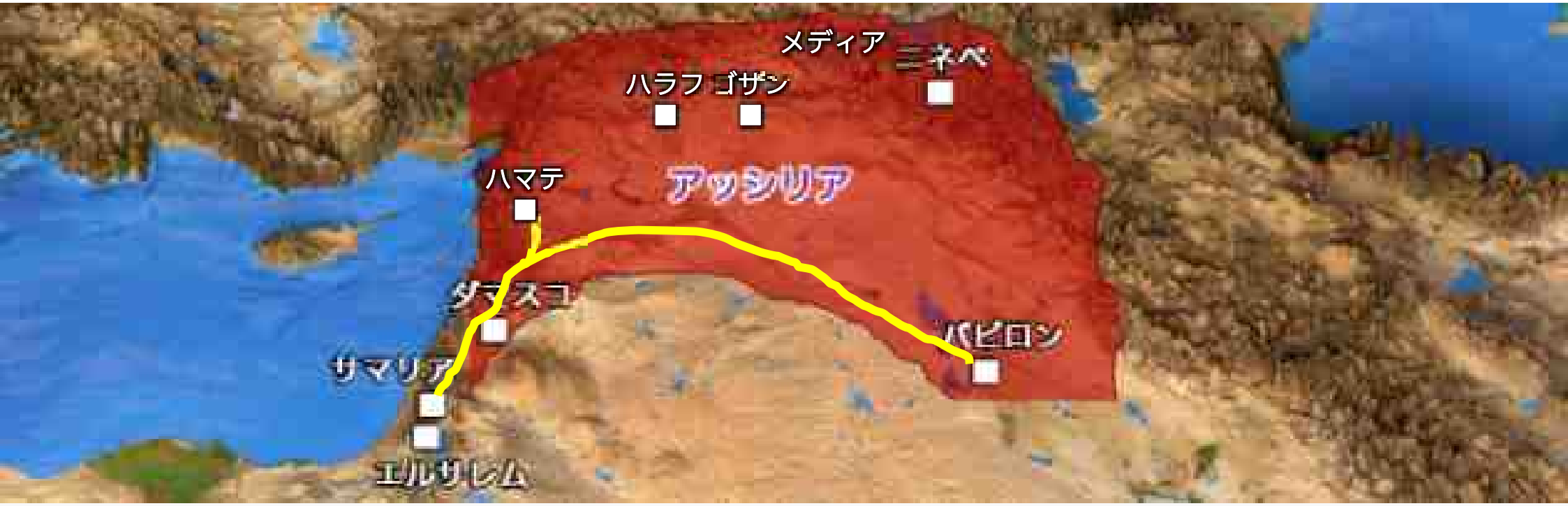
イスラエルの人々は、ヤロブアムが行ったすべての罪に歩み、それから離れなかったので、【主】は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり*、ついにイスラエルを御前から除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリアに引いて行かれた。今日もそのままである。

＊歴代の預言者を通して繰り返し告げられた通り、
　イスラエルは滅ぼされた。
　　➡現在に至るまで、サマリアには廃墟が…。



III．アッシリア捕囚の結果　列王記第二17章24～33節

アッシリアの浮彫

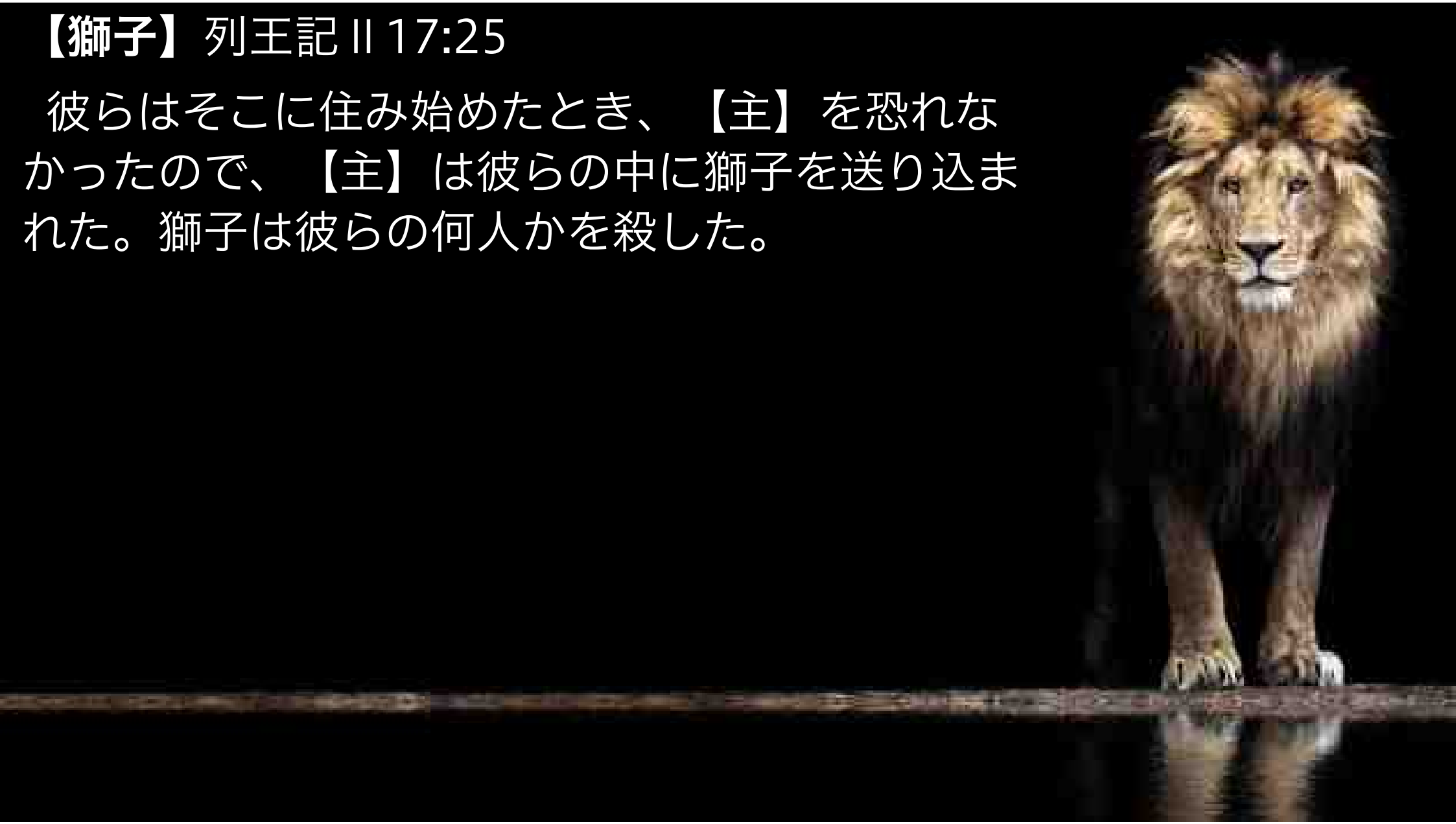


【強制移民】列王記 II 17:24～25

アッシリアの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そしてセファルワイムから人々を連れて来て、イスラエル人の代わりにサマリアの町々に住まわせた。こうして、彼らはサマリアを占領して、その町々に住んだ。

【獅子】列王記Ⅱ17:25

彼らはそこに住み始めたとき、【主】を恐れなかったので、【主】は彼らの中に獅子を送り込まれた。獅子は彼らの何人かを殺した。



【アッシリア王の命令】列王記Ⅱ17:26～27

彼らはアッシリアの王に次のように報告した。
「あなたがサマリアの町々に移した諸国の民は、この土地の神についての慣わしを知りません。それで、神が彼らのうちに獅子を送り込みました。今、獅子が彼らを殺しています。彼らがこの土地の神についての慣わしを知らないからです。」

そこで、アッシリアの王は次のように命じた。
「おまえたちがそこから捕らえ移した祭司の一人を、そこに連れて行け。行かせて、そこに住まわせ、その土地の神についての慣わしを教えさせよ。」

【ことの顛末】列王記Ⅱ17:28～29

こうして、サマリアから捕らえ移された祭司の一人が来てベテルに住み*、どのようにして【主】を礼拝するべきかを教えた。

しかし、それぞれの民は、それぞれ自分たちの神々を造り、サマリア人が造った高き所の宮にそれを安置した。それぞれの民は自分が住む町々でそのようにした。

＊サマリアには、そもそも偽祭司しかいなかった。
　ベテルの金の子牛の祭司に何の力もない。

【持ち込まれた各地の偶像】列王記Ⅱ17:30～31

バビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クテの人々はネルガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、アワ人はニブハズとタルタクを造り、セファルワイム人はセファルワイムの神々、アデラメレクとアナメレクに自分たちの子どもを火で焼いて献げた。

【根強く残る偶像礼拝】列王記Ⅱ17:32～33

彼らは【主】を礼拝したが、自分たちの中から高き所の祭司たちを自分たちで任命し、この祭司たちが彼らのために高き所の宮で祭儀を行った。

彼らは【主】を礼拝しながら、同時に、自分たちが移される前にいた国々の慣わしによって、自分たちの神々にも仕えていた。

■異邦の民はイスラエルの神、主を礼拝したが、従来の偶像を手放すこともなかった。

➡偶像礼拝と変わらない形ばかりの礼拝

【異邦の民の実態】列王記Ⅱ17:34

彼らは今日まで、以前の慣わしのとおりに行っている。彼らは【主】を恐れることはなく、【主】がイスラエルと名をつけたヤコブの子たちに命じられた、掟や定めや律法や命令のとおりに行うこともない。

■主への恐れも従順もない礼拝は、無意味。
主を拒む異邦の民に、何の正当性もない。
➡約束の地に住む恵みに預かりながら、
主に立ち返ることはなかった。

【確認される神の契約】列王記Ⅱ17:35～36

【主】はイスラエル人と契約を結び、次のように命じられた。「ほかの神々を恐れてはならない。これを拝み、これに仕えてはならない。これにいけにえを献げてはならない。

大きな力と、伸ばされた腕をもって、あなたがたをエジプトの地から連れ上った【主】だけを恐れ、主を礼拝し、主にいけにえを献げなければならない。

■主がイスラエルと結んだ契約が確認される。

➡ただ主を恐れ、礼拝するのが神の民の務め。

【主だけを恐れ、従え】列王記Ⅱ17:37～38

主があなたがたのために書き記した掟と定めと律法と命令をいつも守り行わなければならない。ほかの神々を恐れてはならない。

わたしがあなたがたと結んだ契約を忘れてはならない。ほかの神々を恐れてはならない。

あなたがたの神、【主】だけを恐れなければならない。主はすべての敵の手からあなたがたを救い出される。」

【異邦の異住民のその後】列王記17:40～41

しかし、彼らは聞かず、以前の彼らの慣わしのとおりに行った。

このようにして、これらの民は【主】を礼拝すると同時に、彼らの刻んだ像にも仕えた。その子たちも、孫たちも、その先祖たちがしたとおりに行った。今日もそうである。

■異邦の異住民とイスラエルの混血も進んだが、国が築かれることはなかった。

➡その末裔が、サマリア人

Ⅳ. まとめと適用　自分という偶像の時代に対峙しよう

アッシリア捕囚

❶BC740年頃に、第一捕囚。
➡ヨルダン川東岸のルベン族、ガド族、マナセの半部族が捕囚に。

❷BC725～　➡シャルマネセル5世が、3年間サマリアを包囲。

❸BC722　➡サルゴン2世が、サマリアを占領。

❹センナケリブが南王国を侵略、46の街の住民を捕虜に。
一時期エルサレムを包囲。占領は免れる。

失われた十部族？

- アッシリア捕囚民の帰還の記録はない　➡「失われた十部族」？！

- 南北時代に、北から南へ逃れた信仰者たちがいた。
  アッシリア捕囚後も、イスラエル、エフライムへの呼びかけがある。

- 新約時代にも度々、「十二部族」に言及（使徒26:7,ヤコブ1:1）
  十部族の1つアシェル族の女預言者アンナ（ルカ2:36）

- 70年のローマによるエルサレム陥落で、部族の系図は消失、
  レビ族以外の部族のルーツは不明だが、**全部族は今も存続**している。

繰り返し告げられるイスラエルの罪と罰

- 最大の罪は偶像礼拝。初代ヤロブアムが金の子牛を築いて以来、ひたすら偶像礼拝の道を歩み、最悪の状況に陥っていった。

- 偶像礼拝への厳しい戒めが、律法・十戒の中心。偶像礼拝のもたらす結果も、モーセを通して告げられていた。

- 多くの預言者が、何度も警告をしたが、悔い改めなかった。

- 主に背き、主の教えを空しいものとした結果、イスラエル自身が滅ぼされ、空しいものとされた。

- 個々の部族の主権は、失われたまま、今に至っている。

今という時代に重ねて

- 北王国が重なる、自由主義神学(リベラル)の教会、クリスチャン。
  彼らの偶像は、人間の理性、自分たちの正義、理想、主張。

- 「NBUSを憂慮するキリスト者連絡会」の“わら人形論法”
  ➡転向療法を推進する狂信者集団が、NBUS支持者!?

- 脳内で造り上げた仮想敵への脅威を煽り、攻撃する。
  ➡“わら人形論法”は、他者を攻撃する際の常套手段
  ➡聖書は、都合良く利用するだけのもの
  ➡主を信じていない彼らだが、本質的には、偶像礼拝者。
  ➡常にイメージ先行。LGBTQについても、
  広く伝えられているのは、生身の人間の現実の姿ではない。

★　究極の南北時代？　今の時代の使命に歩もう　★

- リベラル・クリスチャンの世界から見た、福音派は輝いていたが…

- 内部で直面した深刻な問題…、支配と依存体質、カルト化した教会、教理的逸脱、無自覚に浸透していくリベラルの影響…。

- 主イエスの福音に堅く立ち、聖書を聖書から告げ知らせて行くこと。それしかない。ますます、この道しかないと確信が深められている。

- 携挙の瞬間まで、主が、宣教の場を守り、機会を与えてくださる。ただ主を信頼して、教会時代の変わらぬ使命、福音宣教に派遣され、主イエスの弟子として互いに育まれていこう。

「天のお父さま。わたしは、あなたに背き、罪を重ねてきました。
日々犯してしまう罪をも告白します。この罪をゆるしてください。
わたしは、神のみ子イエス・キリストが、
①わたしの罪を贖うために十字架で死に、
②墓に葬られ、
③三日目に復活したこと、を信じます。
偶像礼拝の末に、滅びに陥ったイスラエルの姿を我が身に重ねます。
自分の思いが、いかにたやすく、私の神になってしまうでしょうか。
注意深く、謙遜に、日々、主の御言葉に聞き従う者としてください。
主が共におられます。平安の内に、ここから遣わしてください。
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン」